モニタリングサイト1000
Since 2003

2023年度 干潟 Tidal Flats

モニタリングサイト1000調査速報

はじめに

我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これら沿岸域生態系の機能（水質の浄化、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する働きなど）は、私たちの生活に様々な恩恵をもたらしてくれます。

「干潟」とは？

砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯に形成される平らな地形を示します。 干潟は多くの底生生物が暮らす場であるだけでなく、潮の満ち引きがあるため、干出時には鳥類（シギ・チドリなど）のえさ場、冠水時には稚仔魚のえさ場や生育場として、様々な生物に利用されます。また、陸水域から流入する有機物等を生物が利用するため、干潟には水質を浄化する作用などもあります。

永浦干潟サイト（熊本県）



ハクセンシオマネキ

中津干潟サイト（大分県）



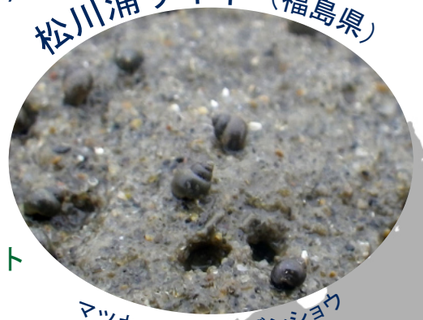
カワアイ（左）とヘナタリ（右）

干潟調査

2008年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の２つの調査により、各サイトの複数エリアで底生動物（貝・カニ・ゴカイの仲間など）の群集組成を調べることで干潟の長期変化をとらえ、自然環境保全のための基礎情報を得ています。

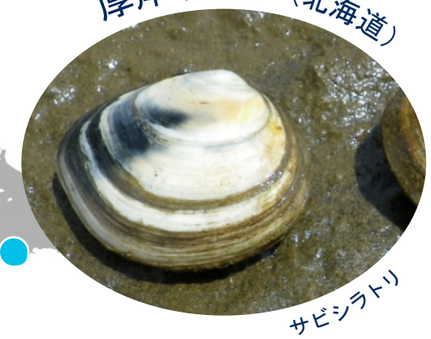
2023年度の調査では、日本沿岸の8箇所のコアサイトと2箇所の協力サイトで、16度目（協力サイトは8度目）となる毎年調査を実施し、干潟表面や底土中に生息する動物の種類や数を調べます。

松川浦サイト（福島県）



マツカワウラカワザンショウ

厚岸サイト（北海道）



サビシラトリ

松名瀬干潟サイト（三重県）



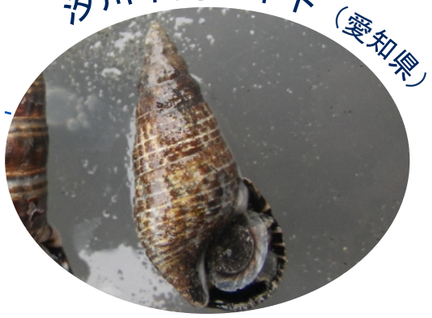
オカミミガイ

盤洲干潟サイト（千葉県）



クシテガニ

汐川干潟サイト（愛知県）



ウミニナ

英虞湾サイト（三重県）

イボウミニナ

南紀田辺サイト（和歌山県）

コゲツノブエ

石垣川平湾サイト（沖縄県）

ルリマダラシオマネキ



コアサイト
協力サイト

速報掲載更新履歴

☑	2024. 2. 22	汐川干潟サイト	▶ Link
☑	2024. 2. 22	松名瀬干潟サイト	▶ Link
☑	2024. 2. 22	英虞湾サイト	▶ Link
☑	2024. 2. 22	石垣川平湾サイト	▶ Link
☑	2024. 1. 10	厚岸サイト	▶ Link
☑	2024. 1. 10	南紀田辺サイト	▶ Link
☑	2024. 1. 10	中津干潟サイト	▶ Link
☑	2023. 11. 7	盤洲干潟サイト	▶ Link
☑	2023. 11. 7	永浦干潟サイト	▶ Link
☑	2023. 9. 1	松川浦サイト	▶ Link

参考情報

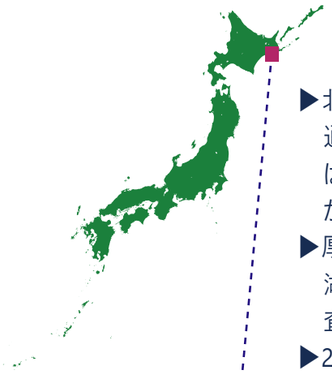
- ☑ モニタリングサイト1000干潟調査の調査項目と内容 ▶ Link
- ☑ 2022年度モニタリングサイト1000 干潟調査速報 ▶ Link
- ☑ 2022年度モニタリングサイト1000 磯・干潟 調査報告書 ▶ Link
- ☑ モニタリングサイト1000沿岸域調査磯・干潟・アマモ場・藻場2008-2016年度とりまとめ報告書 ▶ Link

環境省 自然環境局
生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan
Wetlands INTERNATIONAL

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

厚岸（あっけし）サイト

- 北海道厚岸郡 -



▶北海道東部の別寒辺牛川流域の湿原から厚岸湖を通じて厚岸湾に至る水系に位置しています。この水系は、ラムサール条約に登録されており、良好な自然環境が保全されている場所です。

▶厚岸湾の北側（湾奥部）の前浜干潟（A）と厚岸湖の東側に流れ込むトキタイ川の河口干潟（B）で調査を実施しています。

▶2エリア（A・B）では、2つずつポイントを設けて調査を実施しています。



Aエリア（厚岸湾）
Bエリア（厚岸湖）

この地図は国土地理院地図を基に作成

調査結果概要　A エリア

厚岸湾の北奥部、厚岸湖の出入口に近いところに立地する幅の狭い前浜干潟です。底土は全体的に砂泥質ですが、潮間帯上部では小砂利が混じっています。干潟の東端に小面積ながら転石帯も見られます。干潟の南側の潮下帯にはアマモ場があります。

今年度の調査では、例年と同様に、ミズヒキゴカイ科・タマシキゴカイ科・シロガネゴカイ科の多毛類やアサリ・オオノガイ等の二枚貝類が確認されました。潮間帯上部および下部ともに、干潟表面に見られる生物は極めて少なく、アオサ類やコアマモがパッチ状に点在する程度でした。一方で埋在性の動物では、アナジャコ（写真b）の他、オロチヒモムシ等の他サイトでは見られない動物も確認されました。また、本エリアで見られるアナジャコは、潮間帯上部よりも下部の方が生息密度が高い傾向にありました。



▲ **アナジャコ**：本種は干潟に1m以上の深い孔を掘って暮らしています。孔の中で水流を起こし、水中の懸濁物を食べています。Aエリアでは、特に潮間帯下部で個体数が多い傾向にありました。



▲ **調査の様子**：Bエリアにて、埋在性の動物を採集している様子。



▲ **Aエリアの景観**：厚岸湖の出入口近くにある幅の狭い前浜干潟です。干潟の沖側（潮下帯（写真奥））には、アマモ場が広がっています。なお、調査時には、北海道大学の実習が行われており、教育の場としても利用されています。

調査結果概要　B エリア

厚岸湖の東側の最奥部、トキタイ川の河口部に広がる干潟です。底土は泥質ですが、ある程度固く締まっています。干潟の陸側は、一段高いピート（泥炭）台地になっており、塩性湿地が広がっています。また、塩性湿地では、希少な植物であるアッケシソウが生育しています（写真d）。

今年度の調査では、表在性の優占種であるホソウミニナが潮間帯上部で多く観察される一方、潮間帯下部では少ない状況でした。また、ここ数年、潮間帯で多数観察されていたホウザワイソギンチャク（写真e）も観察されました。埋在性の動物では、例年と同様に、オオノガイ・サビシラトリ・アサリ等の二枚貝類の他、ヤマトカワゴカイ等の多毛類が確認されました。また、サビシラトリの生息密度は前年度に引き続き潮間帯下部で高い傾向にありましたが、潮間帯上部の埋在性の動物は例年より少ない印象を受けました。



▲ **アッケシソウ**：塩性湿地の指標種である本種は、Bエリアの陸側で見られる植生帯に生育しています。前年度に引き続き、その分布はやや拡大している印象を受けました。



▲ **ホウザワイソギンチャク**：岩石等ではなく堆積物からなる場所に生息するイソギンチャクで、Bエリアで見られます。水中で触手を広げている様子が見られました。

調査日　2023. 6. 18、21

サイト代表者：仲岡雅裕
（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

仲岡雅裕(北海道大学)【a-e】
橋本真理菜(北海道大学)
関岡寛知(北海道大学)
甲田聖志郎(北海道大学)
文谷和歌子(北海道大学)
高尾航平(北海道大学)
工藤乃菜(北海道大学)
津金響子(北海道大学)
萩原ひかり(北海道大学)
Lill Lenzmann（Rostock University）
濱野章一(北海道大学)
桂川英徳(北海道大学)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報 (環境省生物多様性センター)
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

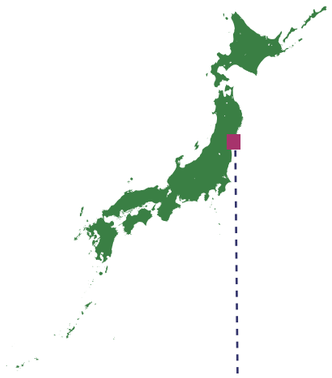
これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands International

まつかわうら

松川浦サイト

- 福島県相馬市 -



- 仙台湾の南端に位置し、砂州（さす）によって太平洋と隔てられた南北に長い潟湖であり、東北地方最大級の干潟です。松川浦県立自然公園に指定されている場所です。
- 多くの場所で岸辺は護岸されており、ヨシ原のようなエコトーン（遷移帯）が見られる場所は限定されています。
- 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。
- 東北地方太平洋沖地震に伴い発生した津波の影響を受けました。



A エリア（鵜の尾）
B エリア（磯部）

この地図は国土地理院地図を基に作成

調査結果概要 A エリア

太平洋との通水路付近に位置し、入江状になった砂泥質の干潟です。海水の影響が大きい高塩分の環境であり、潮下帯にはアマモ場が見られます。また、潮上帯の一部には塩性湿地（ヨシ原）が存在し、ヨシ原内の裸地にはハマサジ、シオクグ、マルミノシバナといった塩生植物も見られます。

今年度の調査では、例年同様、表在性の巻貝のマツカワウラカワザンショウ（*絶滅危惧Ⅱ類；写真a）とホソウミニナが広範囲・高密度で優占していました。これらの他には、ミズヒキゴカイ種群、コケゴカイ、アサリ、ソトオリガイ、ユウシオガイ等が多く見られました。

希少種としてはツバサゴカイ（**絶滅危惧IB類）の棲管も見られましたが、潮間帯上部では前年度よりも少ない印象を受けました。また、今年度の調査では、震災以降において生息が確認されていなかったウミニナも確認されました（写真b）。

調査結果概要 B エリア

松川浦の南側最奥部に位置する泥質の干潟であり、震災以降、干出面積が小さくなりました。また、岸際にあったヨシ原は津波の影響で壊滅的な被害を受け、数年後にはすべて消失しました。本エリアは川の流入により、淡水の影響を受けています。

今年度の調査における表在性の動物としては、ホソウミニナ、ヤミヨキセワタ、ニホンドロソコエビが多く見られました。また、例年多く見られるマツカワウラカワザンショウは確認されませんでしたが、雨天で気温が低いなどの条件から泥の中に潜っていた可能性があります。埋在性の動物としては、汽水性種（ニホンドロソコエビ、ムロミスナウミナナフシ、*Heteromastus* 属の一種等）が多く見られました。

なお、今年度の調査において、オヤイヅオキナガイ（写真d）が調査開始以降初めて確認されました。



▲ **ウミニナ**：Aエリアの干潟上で1個体だけ見つかりました。準絶滅危惧の巻貝で、震災前のAエリアでは数十個体が生息していましたが津波によって流失してしまった種です。震災後の調査では、初めての記録になりました。



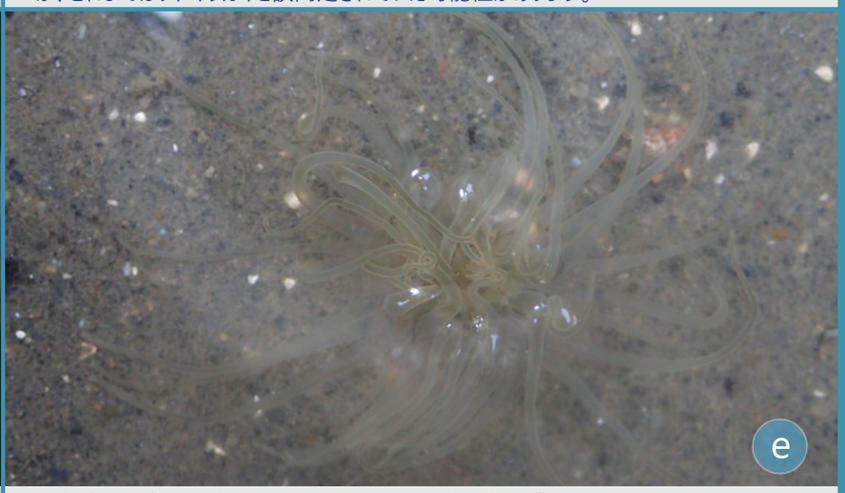
▲ **オヤイヅオキナガイ**：Bエリアの泥中から見つかりました。殻長1cm程度で、ソトオリガイの小型個体によく似ていますが、殻の形状が異なります。今年度の調査で初めて記録されましたが、これまではソトオリガイと誤同定されていた可能性があります。



▲ **マツカワウラカワザンショウ**：本サイトの優占種で、サイズが非常に小さい（殻長1～3mm程度）丸形の巻貝です。干潟上に極めて高密度で生息していますが、注意しないと巻貝であることに気づきにくいです。



▲ **オウギゴカイの生殖個体**：Aエリアで確認されました。体表は虹色に輝き、非常に美しいです。普段は底土に潜って暮らしていますが、繁殖時期になると遊泳のためにイボ足の形を変化させるなど生殖個体特有の形状になることが知られています。



▲ **ホウザワイソギンチャク**：Bエリアの砂泥表面に触手を広げていました。

調査日　2023. 6. 22 - 23

サイト代表者：金谷　弦
（国立環境研究所）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

金谷　弦（国立環境研究所）【a,b】　海上智央（自然教育研究センター）【d】　柚原　剛（東北大学）
鈴木孝男（みちのくベントス研究所）　上野綾子（WIJ）　阿部博和（石巻専修大学）
多留聖典（東邦大学）【c,e】　青木美鈴（WIJ）　加藤翔子（福島県）
安田駿冬（福島県）

* 環境省レッドリスト2020、　** 環境省版海洋生物レッドリストを参照

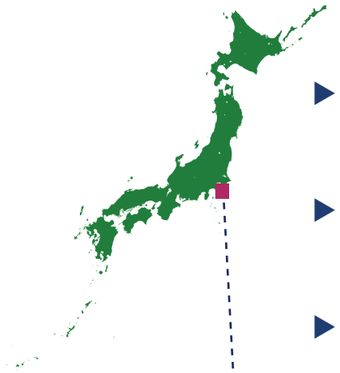
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

盤洲干潟（ばんずひがた）サイト

- 千葉県木更津市 -



- ▶ 東京湾東岸部に位置し、現存する砂質干潟で最大級の面積を誇ります。重要湿地に選定されている干潟です。
- ▶ 前浜干潟と後背湿地からなり、底質はともに砂から砂泥質ですが、後背湿地の方がやや泥質です。
- ▶ 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



この地図は国土地理院地図を基に作成

調査結果概要　A エリア

小櫃川河口に形成された盤洲干潟の外周を形成する前浜干潟です。底質は、潮間帯の上部は砂泥から砂質で、下部では砂質になっています。また、潮間帯上部には後背湿地へと連続する大規模なヨシ原が見られます。

今年度の調査では、潮間帯上部にて、巻貝類のホソウミニナと多毛類のコケゴカイが見られ、他の種は少数でした。また、前年度調査で優占していた二枚貝類のウメノハナガイモドキはほとんど見られず、コケゴカイの密度も前年度の約1/3でした。

潮間帯下部では、巻貝類のイボキサゴが数多く見られたものの、干潟面における密度は、前年度の約1/30でした。なお、潮間帯下部は、2020年から砂の堆積で地盤高が高い状態が続き、アマモ場も沖合に後退したため、調査ポイントではアマモ場に生息する種の多くが確認できませんでした。

希少な種として、ウモレベンケイガニ（**絶滅危惧II）やヤミヨキセワタ（*絶滅危惧II）の他、ツボミ・フトヘナタリ・ウミニナ（写真d）・クリイロカワザンショウ・ムラクモキジビキガイ（写真b）・スジホシムシモドキ（写真c）・クシテガニ・アカホシマメガニ・ミサキギボシムシ・ホウザワイソギンチャクが確認されました。

調査結果概要　B エリア

小櫃川河口右岸の三角洲に形成された後背湿地です。中央部を通るクリーク（澪筋）は最下流で小櫃川本流と合流しています。底質は砂泥で、クリーク上流は主に泥質、河川本流付近は主に砂質です。今年度の潮間帯下部における調査ポイントの河岸満潮線付近は、前年度よりも多量の竹や流木が漂着し、表面を覆っていました（写真a）。

定量調査では、例年同様、種数と個体数ともに少数でした。それぞれの調査ポイントでは、潮間帯上部にて、主にチゴガニとヤマトオサガニが見られ、潮間帯下部にて、巻貝類のホソウミニナとヤマトオサガニが見られました。また、定性調査では、潮間帯上部の干潟面でヒメアシハラガニ等が確認され、潮間帯下部では今年度もウミニナ（写真d）が複数個体確認されました。加えて前年度の調査では確認されなかったヤマトカワゴカイは、潮間帯下部にて、ごく少数が確認されました。

希少な種として、ウモレベンケイガニやヤミヨキセワタの他、ガタヅキ・カハタレカワザンショウ・ツボミ・ウミニナ・クリイロカワザンショウ・ヨシダカワザンショウ・サビシラトリ・ハサミシャコエビ・ヒメアシハラガニ・クシテガニが確認されました。



▲ **ムラクモキジビキガイ：**東京湾では一時期ほぼ見られませんでしたが、近年復活傾向にあるようで、複数個体が確認されました。軟体部が黒色の特徴を持つ巻貝です。



▲ **ウミニナ：**東京湾では一時期激減しましたが、近年復活傾向にあるようで、本エリアの潮間帯下部のポイントでは、例年複数個体が確認されています。今年度は、Aエリアでも、多数のホソウミニナに混じり、本種が少数確認されました。



▲ **Bエリア景観：**潮間帯下部の調査ポイントにおける河道部に見られるヨシ原の際の様子。多量の流木や竹等が漂着して、表面が覆われている状態でした。



▲ **スジホシムシモドキ：**潮間帯下部において、少数ですが確認されました。強く刺激を与えると体にくびれが生じて自切することもあります。本種を含むホシムシ類は、過去には独立した動物門（星口動物門）と考えられていましたが、現在はゴカイ類と同じ環形動物門に含まれるようになりました。



▲ **ヒガタケヤリムシの一種**（*Laonome* sp.）**：**砂泥質の干潟面で触手（直径2cm程度）を広げている様子を観察することができます。*Laonome* 属には複数の近似種がおり、外来種が含まれている可能性も示唆されています。

調査日　2023. 6. 7 - 8

サイト代表者：多留聖典
（東邦大学理学部東京湾生態系研究センター）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

多留聖典（東邦大学）【a,b,d】　海上智央（自然教育研究センター）【c,e】　尾島智仁（東京港水中生物研究会）
金谷　弦（国立環境研究所）　上野綾子（日本国際湿地保全連合）　尾島雅子（東京港水中生物研究会）
鈴木孝男（みちのくベントス研究所）　青木美鈴（日本国際湿地保全連合）　山北剛久（海洋研究開発機構）

* 環境省レッドリスト2020、　** 環境省版海洋生物レッドリストを参照

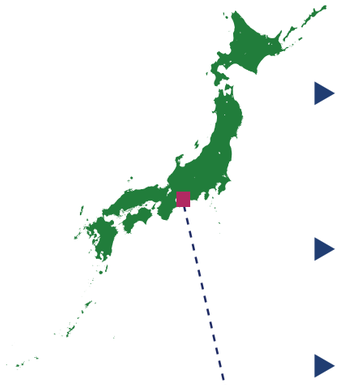
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報 (環境省生物多様性センター)
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

汐川干潟（しおかわひがた）サイト

- 愛知県豊橋市・田原市 -



- 渥美半島と知多半島に挟まれた三河湾奥東側の田原湾に位置する干潟で、汐川をはじめとし、蜆川、紙田川等が流入している大きな河口干潟です。
- 汐川と紙田川の河口部にある砂泥質の干潟では、巻貝、カキ類、ゴカイ類等が多数見られます。
- 2 エリア（B･C）で、3 つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



調査結果概要　Bエリア

田原湾最奥部に流れ込む汐川の河口から田原湾に広がる広大な干潟の中央部に位置し、底質は砂泥質です。潮間帯中部には広い範囲でカキ礁が見られます。

今年度の調査では、堤防直下の干潟表面にアオサ類が堆積している様子が見られましたが、前年度と比べて減少していました。干潟全体の表面では前年度同様にウミニナが見られ、潮間帯上部にかけてはヘナタリが高密度に分布していました。また、潮間帯中部のカキ礁では、その間隙にタテジマイソギンチャクの他、フジツボ類や貝類が付着していました。潮間帯下部では、ギボシムシ類の糞塊も見られました。一方底土中では、ゴカイ科やチロリ科等の多毛類の他、ユウシオガイやオキシジミ等の二枚貝類が見られました。また、潮間帯下部ではギボシムシ類が確認できました。

希少な種としては、ニンジンイソギンチャク（**絶滅危惧 IB 類; 写真b）、イボウミニナ（*絶滅危惧 II 類; 写真c）が見られました。また、ウミニナ類やアラムシロといった巻貝の殻上にマキガイイソギンチャク（**絶滅危惧 II 類; 写真c）が付着していました。

調査結果概要　C エリア

田原湾口部に流れ込む紙田川の河口に広がる干潟です。底質はBエリアよりも泥質で、潮間帯上部の表層には礫が多く含まれています。また、潮間帯上部には、塩性湿地が見られます。近年、沖側に砂が堆積しつつあり、干潟の面積が拡大しています。

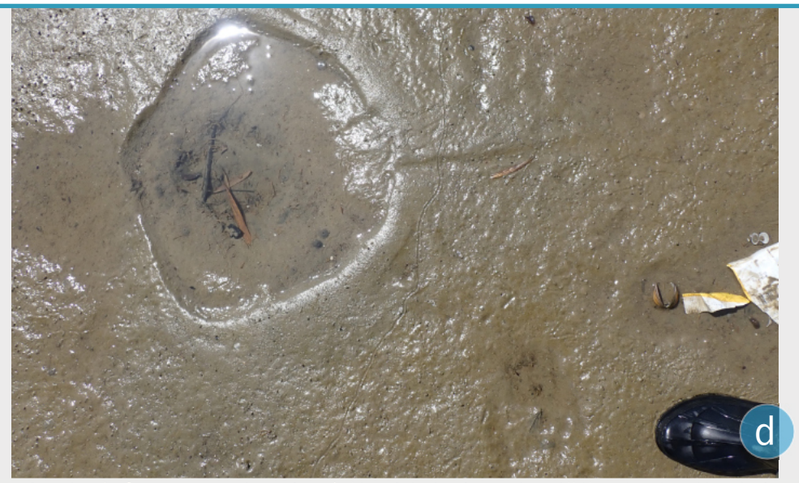
今年度の調査では、アオサ類の堆積は見られませんでしたが、アカエイの生痕（写真d）が多数見られました。潮間帯上部から下部の干潟表面ではウミニナが見られ、特に潮間帯上部ではヘナタリが高密度に分布していました。一方底土中では、ゴカイ類やミズヒキゴカイ類の多毛類の他、オキシジミやソトオリガイ等の二枚貝が見られました。また今年度の調査では、これまで本エリアの潮間帯中部と下部のポイントのみで記録されていた多毛類のヒガタケヤリ（写真e）が潮間帯上部でも確認されました。

希少な種としては、イボウミニナ（*絶滅危惧 II 類）、ヤミヨキセワタ、マキガイイソギンチャクが見られました。

なお、本エリアを含む汐川周辺の塩性湿地では、オカミミガイ（*絶滅危惧 II 類）やカワザンショウ類も見られましたが、それとともに外来種のミシシッピアカミミガメが多数観察されました。



▲ **ニンジンイソギンチャク**：**絶滅危惧IB類のイソギンチャクです。ニンジンそっくりの鮮やかなオレンジ色をしています。本種の分布が確認された場所は限定されており、なかなか見ることができません。



▲ **アカエイの生痕**：Cエリアの泥の上に多数見られました。エイは、満潮になると干潟で餌を取り、干潮とともに沖に泳いでいきます。



▲ **定量調査の様子**：干潟表面に配置した方形枠内に生息する生物の種類や数を調べてから、底土中の生物を調べます。アオサ類の間には、ヘナタリやウミニナ等の巻貝が多数見られました。



▲ **イボウミニナとマキガイイソギンチャク**：両種ともに絶滅危惧II類に該当する種です。マキガイイソギンチャク（矢印）は、巻貝の殻の表面にしか生息しない共生性のイソギンチャクです。



▲ **ヒガタケヤリ**：汐川干潟ではCエリアの泥底のみで見られます。年によって消長が大きい種です。写真のように泥表面で鰓を広げます。

調査日　2023. 5. 9 - 10

サイト代表者：木村妙子
（三重大学大学院生物資源学研究科）

調査者･調査協力者（所属）【撮影した写真】
木村妙子（三重大学）【b-e】
木村昭一（三重大学）【a】
川井田 俊（島根大学）
藤岡エリ子（汐川干潟を守る会）
藤岡純治（汐川干潟を守る会）

*　環境省レッドリスト2020、　**　日本ベントス学会干潟の絶滅危惧動物図鑑参照

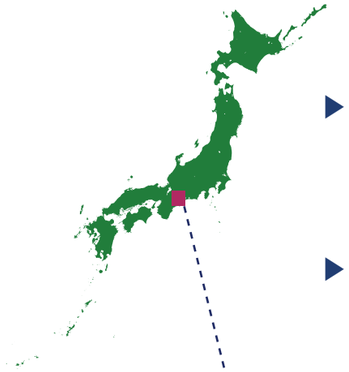
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報 (環境省生物多様性センター)
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

松名瀬干潟（まつなせひがた）サイト

- 三重県松阪市 -



- 内湾としては三河湾と併せて国内最大面積を誇る伊勢湾の西側に位置する干潟です。周辺海域は、アサリ・ハマグリ・ヤマトシジミの好漁場で、国内有数の魚介類の産地ですが、近年は著しいアサリの減少が見られます。
- 陸から海への移行帯（エコトーン）が残る貴重な場所で、潮上部のヨシ原・塩沼・感潮クリークに続き、泥質・砂質干潟が形成され、潮下帯にはアマモ場が見られます。
- 2 エリア（A・B）で、調査を実施しています。



この地図は国土地理院地図を基に作成

調査結果概要　Aエリア

伊勢湾に面した場所に形成された前浜干潟です。干潟の上部には砂丘が見られ、それを挟んで陸側には後背湿地が発達しています。

今年度の調査では、潮間帯上部の後背湿地において、カワザンショウガイ、ホソウミニナ、フトヘナタリ等の巻貝が高密度で生息している様子が見られました。また、干潟表面において、ヤマトオサガニ、チゴガニ、アシハラガニ等のカニ類も多く確認できました。一方底土中では多毛類のイトメが多く確認できました。さらに、植生帯では、ハクセンシオマネキ（*絶滅危惧 II 類）、アカテガニ、ユビアカベンケイガニ等のカニ類も見られました。

潮間帯中部では、干潟表面において、ホソウミニナやウミニナ等の巻貝の他、ユビナガホンヤドカリが高密度で生息している様子が見られました。また、潮間帯下部では、巻貝のアラムシロやウニ類のハスノハカシパン等が確認できました。希少な種としては、ウミニナ類の殻上に共生するツボミ（*準絶滅危惧; 写真b）、ハマグリ（写真c）やカワアイ（共に*絶滅危惧 II 類）、ハクセンシオマネキが確認されました。



▲ **ウミニナの殻上に付着するツボミ（矢印）**：共に*準絶滅危惧の貝類です。両種は共生関係にあると言われています。

調査結果概要　Bエリア

伊勢湾に流入する櫛田川河口部に形成された河口干潟です。底質は砂であり、潮間帯上部にはヨシ原が見られます。

今年度の調査では、潮間帯上部の干潟表面において、巻貝のフトヘナタリが多く密集している様子とともに、ハクセンシオマネキ（*絶滅危惧 II 類）等のカニ類も確認できました。また、ヨシ原では、アシハラガニやユビアカベンケイガニの他、巻貝のオカミミガイ（*絶滅危惧 II 類; 写真d）も確認できました。

潮間帯下部では、干潟表面において、カワザンショウガイの高密度分布が見られました。その他にはホソウミニナやウミニナ等の巻貝、ケフサイソガニ等も確認できました。また、底土中では、ソトオリガイやクチバガイ等の二枚貝、ゴカイ科の一種等が確認できました。



▲ **オカミミガイ**：*絶滅危惧 II 類の巻貝です。オカミミガイの仲間には絶滅が危惧されている種が多く、本種もその一つです。塩性湿地ではさまざまな成長段階が確認されました。



▲ **調査者**：今年度の調査も地元の中学・高校と共同で行いました。



▲ **ハマグリ**：*絶滅危惧 II 類の二枚貝です。潮間帯下部で確認されました。松名瀬干潟では、ここ数年アサリの減少が見られるため、一般の潮干狩りは禁止されています。



▲ **調査の様子**：干潟表面において、高密度に生息していた微小なカワザンショウガイを計数しています。

調査日　2023. 5. 5

サイト代表者：木村妙子
（三重大学大学院生物資源学研究科）

調査者・調査協力者（**所属**）（**三重高校**）7名
【撮影した写真】
木村 妙子（**三重大学**）【b-d】
木村 昭一（**三重大学**）【a,e】
鈴木 志英　宮田 周平
福田 侑真　石川 恵雅
小﨑 梨子　濱地 孚音莉
原林 もも

（**三重中学**）14名
石井 智也　片岡 洋平
金子 優斗　塩井 みなみ　田村 陽菜
中西 彩侑　西村 公希　後藤 大駕
塚本 一心　野村 郁馬　溝田 那月
新川 柚花　畑 惺士郎　今西 悠真

* 環境省レッドリスト2020参照

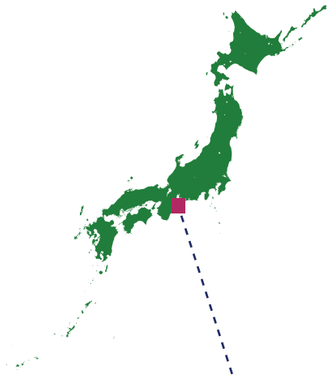
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

英虞湾（あごわん）サイト

- 三重県志摩市 -



▶ 熊野灘に面したリアス海岸特有の多数の小さな支湾からなる内湾に位置する干潟です。

▶ 周辺では南日本でよく見られる海岸植生（ハイネズ、トベラ、ウバメガシ）も見られ、ヨシ原からなる塩性湿地が現存している貴重な沿岸域です。また、「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」にも選定されています。

▶ 湾の中央部（A エリア）と北部の湾奥（B エリア）に形成されている前浜干潟で、2 つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



調査結果概要　Aエリア

英虞湾のほぼ中央部に位置し、急峻な崖に囲まれた小湾の奥にある前浜干潟です。後背地の崖付近には岩礁性の底生生物が見られ、潮間帯上部にはハマサジ、ハマゴウ、ハマボウ等の植生が見られます。

今年度の潮間帯上部の調査では、干潟表面において、巻貝のウミニナ、ホソウミニナ、ヘナタリ、フトヘナタリが確認されました。一方底土中において、チゴガニが確認されました。また、定性調査では、希少な種であるシイノミミガイ（*絶滅危惧 I 類）の他、オカミミガイ（写真b）やドロアワモチ（共に*絶滅危惧 II 類）も確認されました。

潮間帯下部の調査では、干潟表面に生息するホソウミニナと共に、イボウミニナ（*絶滅危惧 II 類）が優占していました。一方底土中には、アナジャコ類が生息しており、二枚貝のマゴコロガイが寄生してる様子も確認されました。その他にもマガキ、アンパルヤドカリ、多毛類のツバサゴカイ（**絶滅危惧 IB 類）が確認されました。また、人為的導入の可能性があるハマグリ（*絶滅危惧 II 類）は前年度に複数個体確認されましたが、今年度はすべて死殻でした。さらに定性調査では、希少な種であるホソコオロギ（*絶滅危惧 I 類）やヒメマスオ（*絶滅危惧 II 類）の他、ユキガイ（写真c）やクシケマスオ（共に*準絶滅危惧）も確認されました。

調査結果概要　Bエリア

英虞湾北部の支湾奥部に形成された前浜干潟です。登茂山（Aエリア）よりさらに閉鎖的なリアス地形の内湾奥に位置しています。潮間帯上部には、小規模なヨシ原が見られます。

今年度の潮間帯上部の調査では、干潟表面において、ウミニナとヘナタリが高密度に分布しており、イボウミニナやカワアイ（共に*絶滅危惧 II 類）も確認されました。また、マガキの殻上にはクログチやヒメコザラが付着している様子も見られました。一方底土中では、コメツキガニ、チゴガニ、ハサミシャコエビ、ヒモイカリナマコ等が確認されました。

潮間帯下部の調査では、干潟表面において、イボウミニナ、カワアイ、ヘナタリが確認されました。一方底土中では、二枚貝のシオヤガイ、コオキナガイ（写真d）やイチョウシラトリ（共に*絶滅危惧 I 類）、ユビナガホンヤドカリが確認されました。



▲ **オカミミガイ**：*絶滅危惧 II 類の巻貝です。潮間帯上部で確認されました。このサイトでは*絶滅危惧 I 類のシイノミミガイは多く見られますが、オカミミガイは非常に珍しいです。



▲ **コオキナガイ**：*絶滅危惧 I 類の二枚貝です。潮間帯下部で確認されました。全国的に生息地が少なく、英虞湾は分布の東限にあたると考えられています。



▲ **定量調査の様子**：一定量の底土を採取し、篩（2mm目合）で底土を篩った後、篩に残った生物の種類と数を計数します。



▲ **ユキガイ**：*準絶滅危惧の二枚貝です。Aエリアの潮間帯下部で確認されました。英虞湾の個体群は分布の北限にあたる可能性が高く、非常に稀です。



▲ **クロベンケイガニ**：日本各地で見られるベンケイガニ科のカニです。ヨシ原等に穴を掘って暮らしており、河川近くの田の畔や水路等でも見られます。

調査日　2023. 5. 20 - 21

サイト代表者：木村妙子
（三重大学大学院生物資源学研究科）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

木村妙子（三重大学）【a-e】　桐山　綾（三重大学）
木村昭一（三重大学）　胡ひんいつ（三重大学）

*環境省レッドリスト2020、　**環境省版海洋生物レッドリスト参照

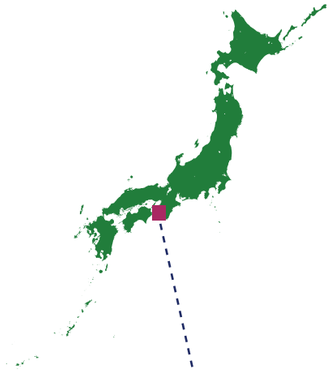
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

南紀田辺（なんきたなべ）サイト

- 和歌山県田辺市 -



- 紀伊半島南西部の田辺湾中央に位置し、白浜から田辺湾沿岸部は「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」に選定されています。また、吉野熊野国立公園に指定されている場所です。
- 湾央（湾の中央）に位置する水路でのみ外海とつながる潟湖干潟（A）と、小さな入り江の先端付近の前浜干潟（B）で調査を実施しています。
- 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



Aエリア（内之浦）
Bエリア（鳥の巣）

この地図は国土地理院地図を基に作成

調査結果概要　Aエリア

水路でのみ外海とつながる潟湖干潟です。潮間帯上部にはヨシ原が少しあり、潮間帯下部には干潟表面にアオサが見られます。底質は軟泥で、少し掘ると還元層（酸素が少なく硫化水素を含む黒い層）が多く見られます。

今年度の調査において、潮間帯上部の干潟表面では巻貝のヘナタリが優占し、底土中では二枚貝のオキシジミが多く確認されました。また、潮間帯下部の干潟表面では巻貝のコゲツノブエが優占し、底土中では二枚貝のトガリユウシオガイが多く確認されました。これらの貝類の他には、甲殻類ではチゴガニやヒメヤマトオサガニ等、多毛類ではコアシギボシイソメ等も確認されました。さらに定性調査において、甲殻類ではユビアカベンケイガニ（写真b）やハクセンシオマネキ、巻貝ではフトヘナタリやミヤコドリ（写真c）、二枚貝ではマガキやイオウノシタタリ等が確認されました。

本エリアでは、コゲツノブエ、カワアイ、ハクセンシオマネキ、イオウハマグリ、ウモレベンケイガニ等の希少な種も確認できました。



▲ **ユビアカベンケイガニ**：ベンケイガニの仲間でハサミの先（指部）が赤色になる特徴が見られます。ヨシ原やマングローブ等の潮間帯上部で見つけることができます。



▲ **Aエリア景観**：潮間帯上部の調査ポイントの様子。干潮になると干潟が現れ、水路が残ります（写真中央）。水路を通じて海と繋がっています（写真奥が海側）。



▲ **ミヤコドリ**：殻長1cm程度の小型の貝類です。生時は殻表面に還元鉄が付着して茶褐色になることが知られています。

調査結果概要　Bエリア

小さな入り江の先端近くに見られる前浜干潟です。潮下帯には海草類のコアマモ・アマモが群生し、その一部は潮間帯下部まで広がっています。潮間帯上部には砂質干潟の典型種が多く生息し、大きな岩や干潟域の端にある転石帯には磯の典型種も多く見られます。

今年度の調査において、潮間帯上部の干潟表面ではウミニナやホソウミニナ等が確認され、底土中ではコメツキガニや多毛類等が確認されました。また、潮間帯下部の干潟表面ではユビナガホンヤドカリや巻貝のホウシュノタマ等が確認され、底土中では二枚貝のウメノハナガイが数多く確認されました。さらに定性調査において、ヒザラガイやアラレタマキビ等の磯で見られる動物の他、イソアワモチ（写真d）やオキナワヤワラガニ（写真e）等が確認されました。

本エリアでは、トリウミアカイソモドキやチゴイワガニ等の希少な種も確認できましたが、例年数多く見られるコゲツノブエが確認できませんでした。



▲ **イソアワモチ**：体長は5cm程度で、空気呼吸する貝類です。体は柔らかく、背面にはイボ状突起に覆われます。また触覚は体の下から出ています。



▲ **オキナワヤワラガニ**：甲羅幅は5mm未満の小型のカニです。甲羅は石灰化に乏しく全体的に柔らかい。また歩脚が細長いことも特徴です。

調査日　2023. 6. 20 - 21

サイト代表者：古賀庸憲
（和歌山大学教育学部）

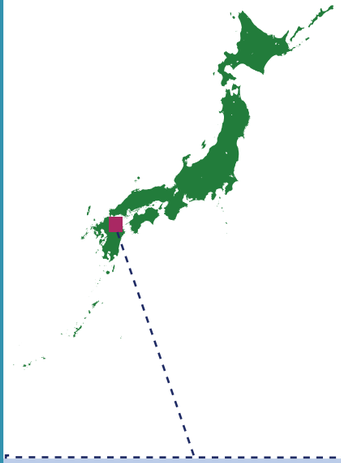
調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】
古賀庸憲（和歌山大学）【a-c, e】
渡部哲也（西宮市貝類館）【d】
香田　唯（兵庫県在住）
上出貴士（和歌山県日高振興局）
上野綾子（日本国際湿地保全連合）

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000
環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan
Wetlands INTERNATIONAL

中津干潟サイト
（なかつひがた）



- 大分県中津市 -

- ▶ 瀬戸内海南西端の周防灘に面した干潟です。瀬戸内海では最大の面積を誇る自然干潟で、カブトガニが生息する数少ない干潟のひとつです。
- ▶ 主に砂質で、河口干潟、前浜干潟、塩性湿地、転石帯、アマモ場等の多様な環境が見られます。
- ▶ 3エリア（A・B・C）で、3つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



調査結果概要 A・B エリア

Aエリアは、中津川河口にある河口干潟です。底質は泥質から砂質で、一部に礫場（礫が集まっている場所）が見られます。潮間帯上部の一部にはヨシ原が点在しています。Aエリアでは前月の集中豪雨による出水の影響が懸念されましたが、塩性湿地内では希少な巻貝のクロヘナタリやシマヘナタリ（いずれも*絶滅危惧Ⅰ類）の他、カニ類のシオマネキ（写真a）やハクセンシオマネキ（いずれも*絶滅危惧Ⅱ類）等も確認できました。今年度調査における最大の特徴は、前年度に引き続きシオマネキの数が増加していたことと、ワカウラツボ（*絶滅危惧Ⅱ類；写真b）が確認できたことです。

Bエリアは広大な前浜干潟です。底質は砂質で、一部に礫場も見られます。また、沖合にはコアマモが点在しています。今年度調査では、オオシンデンカワザンショウ（*絶滅危惧Ⅱ類；写真c）やアサリ、アミメキンセンガニ、多毛類のミナミシロガネゴカイやアシビキツバサゴカイ等が見られました。

なお、Bエリアの上部（陸側）に隣接する塩性湿地において、シオマネキ、ハクセンシオマネキ、クロヘナタリ、シマヘナタリ、ヤマトカワゴカイ、ヤマトキョウスチロリ等も見られました。

調査結果概要 C エリア

Cエリアは塩性湿地から砂泥質干潟、転石帯といった多様な環境が見られます。干潟よりも陸側には塩性湿地があり、沖合にはコアマモ帯や一部人工的に構築された転石帯があります。

今年度の調査では、カブトガニ（*絶滅危惧Ⅰ類；写真d）、イチョウシラトリ（*絶滅危惧Ⅰ類）、イボウミニナ（*絶滅危惧Ⅱ類）等の希少な種の他、多毛類ではチマキゴカイ、ツバサゴカイ、ムギワラムシ等が見られました。また、沖合の転石帯ではイタボガキ（*絶滅危惧Ⅰ類）、クロヒメガキ、オオヘビガイ等の付着性の種も見られました。

景観変化として、これまで分布面積が拡大傾向にあったコアマモは、今年度は減少している印象を受けました。



▲ **ワカウラツボ**：殻長が約5mm程度の小さな巻貝です。本サイトでは調査開始以降初めて確認されました。



▲ **カブトガニ**：今年度は多数観察されました。写真は10cm以下の小型個体です。



▲ **シオマネキ**：Aエリアの塩性湿地では、ここ数年、本種の生息密度が増加しているようです。



▲ **オオシンデンカワザンショウ**：殻長が1.5mm程度の微小巻貝です。Bエリアの干潟表面で見られました。



▲ **カニダマシの一種**：甲殻類の仲間で、多毛類のムギワラムシが作る棲管内で見つかりました。ムギワラムシと共生していたと考えられます。甲幅は5mm程度でした。

調査日　2023. 8. 1 - 3

サイト代表者：浜口昌巳
（福井県立大学海洋生物資源学部）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】
浜口昌巳（福井県立大学）【a-e】　海上智央（自然教育研究センター）
西　栄二郎（横浜国立大学）　青木美鈴（日本国際湿地保全連合）
北西　滋（大分大学）　上野綾子（日本国際湿地保全連合）

* 環境省レッドリスト2020を参照

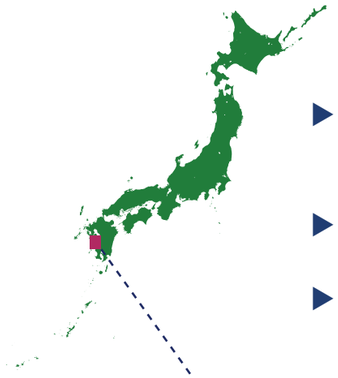
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

ながうらひがた 永浦干潟サイト

- 熊本県上天草市 -



- ▶ 有明海と八代海を結ぶ瀬戸に位置する永浦島の南部の前浜干潟です。周囲は雲仙天草国立公園に指定されています。
- ▶ 永浦島周辺には、小規模ながら生物相が豊かな干潟が点在しています。
- ▶ 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



調査結果概要　A エリア

永浦島の南西部にある前浜干潟です。潮上帯は護岸されており、潮間帯は上部は砂泥質、下部は泥質からなる干潟です。日本最大のハクセンシオマネキの生息地として有名な場所でもあります。

今年度の調査では、巻貝のウミニナ類、甲殻類のハクセンシオマネキ等が多く見られました。また、干潟表面では、海藻のボウアオノリ類が増加したためか、ホトトギスガイも増えていました。例年どおり、マキガイイソギンチャクや多毛類のツバサゴカイ（**絶滅危惧ⅠB類）等が確認された一方で、本調査開始以降初めて、外来種の巻貝であるカラムシロ（写真b）が複数確認されました。

定性調査を実施している塩性湿地では、確認できる生物の種類が減少しており、今年度の調査では、ハマガニ等の4種のみの確認にとどまりました。

調査結果概要　B エリア

永浦島の南東部にある前浜干潟です。潮上帯は自然海岸であり、全体的に砂泥質ですが、転石や岩礁も見られます。また、潮間帯下部ではアマモ場が広がっています。

今年度の調査では、ウミニナ類、ホトトギスガイ、テナガツノヤドカリ、オサガニ、ホシムシ類等が多く見られました。Aエリア同様、Bエリアの干潟表面でもボウアオノリ類が増加していました（写真a）。他に、腕足類のミドリシャミセンガイの一種、巻貝のゴマフダマ（*絶滅危惧Ⅰ類; 写真d）、クモヒトデ類等が見られました。

なお、2019年度に永浦島で初めて確認されたウミヒルモ（海草）の群落は確認されませんでしたが、アマモ・コアマモ（海草）の群落が広がっている様子が観察されました。また、定性調査で確認された種はアシハラガニ（写真e）等のわずかな種のみとなりました。



▲ **カラムシロ（外来種）**：本調査開始以降初めて確認されました。個体数は多いようです。また、一部の個体には、マキガイイソギンチャクの一種が付着していました。近縁のアラムシロガイ・ムシロガイ・カニノテムシロガイ同様に腐肉食です。



▲ **ゴマフダマ**：肉食性の巻貝です。殻には暗紫色の斑点が多数あるため「胡麻斑玉（ごまふだま）」と呼ばれています。絶滅危惧Ⅰ類ですが、場所によっては近年増加傾向にあるようです。



▲ **景観（Bエリア潮間帯下部）**：潮間帯では、ボウアオノリの一種（写真のうすい緑の部分）が増加していました。また、本エリアでは、潮間帯にコアマモの群落、潮下帯にアマモの群落が見られました。



▲ **ヒメヤマトオサガニ**：泥干潟に巣穴を掘って生活する甲幅1.5cmほどのカニです。ハサミを高く上げて威嚇・求愛を行う点で、ハサミを高く上げない近縁のヤマトオサガニと区別できます。



▲ **アシハラガニ**：塩性湿地周辺の干潟に巣穴を掘って生活する甲幅3cmほどのカニです。雑食性で、ヨシ等の植物や打ち上げられた動物を食べる他、チゴガニ等の小型のカニを襲って食べることもあります。

調査日　2023. 6. 3-4, 18-19

サイト代表者：逸見泰久
（熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

逸見泰久（熊本大学）【a-e】　山田勝雅（熊本大学）　那須友哉（熊本大学）
嶋永元裕（熊本大学）　塚本　要（熊本大学）　飯盛時生（熊本大学）
逸見高志（熊本県在住）

* 環境省レッドリスト2020、　** 環境省版海洋生物レッドリストを参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報　（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

石垣川平湾サイト（いしがきかびらわん）

- 沖縄県石垣島 -



▶ 石垣島西北岸にある内陸に入り込んだ湾に面しており、サンゴ礁の切れ目である狭い水路で東シナ海に通じています。川平湾からその後背の於茂登岳にかけては、国の名勝と西表石垣国立公園に指定されています。

▶ 底質は砂と砂泥質の前浜干潟で、後背地にはマングローブ林や石灰岩の岩礁海岸等が見られます。

▶ 2 エリア（A・B）で、2 つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



調査結果概要　Aエリア

川平湾湾口部の近くに位置し、干潟の後背には小河川とマングローブ林、石灰岩の岩礁海岸が見られます。底質は砂泥質ですが、海岸線付近では砂礫が混じり、表層直下には還元層（酸素が少なく硫化水素を含む黒い層）が見られます。潮間帯下部にはアマモ類が生育しています。

今年度の調査では、定量調査において、例年どおり二枚貝のウメノハナガイが最も多く確認されました。その他、カニ類ではミナミコメツキガニとリュウキュウコメツキガニ、二枚貝ではナタマメケボリ、多毛類のチロリ科等が確認されました。また、潮間帯下部では、アマモ類の葉上にウズマキゴカイ亜科の一種が多く確認されました。

定性調査において、環形動物ではタテジマユムシやスジホシムシ、巻貝ではホウシュノタマやタケノコカニモリの他、カスリウズラタマキビ（写真b）が確認されました。また二枚貝ではタママキ、アラスジケマン、オキナワヒシガイの他、カニ類ではフタハオサガニやマルテツノヤドカリ等が確認されました。

希少な種としては、調査開始以降初めて、ガタチンナン（*絶滅危惧 II 類; 写真c）やコウナガカワスナガニ（*準絶滅危惧）が確認されました。また、前年度に引き続き、ヘゴノメミミガイ（*絶滅危惧 I 類）やニワタズミハマシイノミ（*絶滅危惧 II 類）も確認されました。



▲ **カスリウズラタマキビ**：小型の巻貝（写真は殻長9mm）で後背地で確認されました。主に宮崎県等で記録がありますが、沖縄県での記録は非常に少ないです。



▲ **Aエリアの景観**：潮間帯下部のアマモ場から見た調査エリアの様子。



▲ **ガタチンナン**：絶滅危惧II類の微小な巻貝（殻径4mm程度）でタテジマユムシと共生する種です。八重山諸島では初記録となりました。沖縄島では比較的数多く見られる場所もありますが、本地域ではかなり数が少ないと推測されます。

調査結果概要　Bエリア

川平湾の湾奥部に位置し、干潟の後背には海浜植物帯とトキワギョリュウ類の林が見られます。流入する小河川の河口部には小規模なマングローブ林も見られます。底質は砂または砂泥質で、表層直下に還元層が見られます。

今年度の調査では、定量調査において、Aエリア同様に二枚貝のウメノハナガイが多く確認されました。その他、カニ類ではミナミコメツキガニとリュウキュウコメツキガニ、二枚貝ではタママキやアシベマスオ、多毛類ではチロリ科が確認されました。

定性調査において、カニ類のマルテツノヤドカリやフタハオサガニ、巻貝のタケノコカニモリやホウシュノタマ、イソギンチャク類のムシモドキギンチャク科の一種が確認されました。

希少な種としては、調査開始以降初めて、ヨウナシカワスナガニ（*準絶滅危惧）やヤドリムツアシガニ（**情報不足）が確認されました。また、前年度に引き続き、ヘゴノメミミガイ（*絶滅危惧 I 類）の他、ヒメヒラシイノミガイとツバサカノコ（共に*準絶滅危惧）が確認されました。



▲ **キバウミニナ**：後背地にて落ち葉を集団で摂食していました。また、調査対象としている流入小河川の一つで新たに幼貝が確認されました。本種は自然分布ではなく人為的に移入されたと考えられており、生息範囲の拡大が懸念されます。



▲ **トラフシャコ**：シャコの仲間では最大級の大きさとなり、東南アジア等では食用にされています。

調査日　2023. 7. 16 - 17

サイト代表者：岸本和雄
（沖縄県農林水産部水産課）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】
岸本和雄（沖縄県農林水産部）【a,c,e】
狩俣洋文（沖縄県農林水産部）
田村　裕（沖縄県農林水産部水産海洋技術センター石垣支所）
久保弘文（沖縄県衛生環境研究所）【b,d】
藤田喜久（沖縄県立芸術大学）

*　環境省レッドリスト2020、　**　環境省版海洋生物レッドリスト参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。

出典：モニタリングサイト 1000　2023年度干潟調査速報 (環境省生物多様性センター)
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2023.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html